No.7

ニュースレター

2003年12月10日発行
関東学院大学 キリスト教と文化研究所
〒236-8501
神奈川県横浜市金沢区六浦東一丁目50番1号
TEL：045-786-7873（研究所直通）
発行者：森島牧人
(Director：Makito Morishima)

INSTITUTE FOR THE STUDY OF CHRISTIANITY AND CULTURE KANTO GAKUIN UNIVERSITY

目　次

ごあいさつ……1
関東学院大学における
セツルメント運動の歴史と展望……1
公開シンポジウム
「坂田祐と関東学院」の報告……3
客員研究員の広場
「いのち」を考える研究プロジェクトに参加して……4

ごあいさつ

主の聖名を讃美いたします。

キリスト教と文化研究所はおかげさまで２周年を迎え、研究会、シンポジウムなどの活動も活発に行われるようになりました。皆様のお支えを感謝いたします。

今回のニュースレターNo.7は、今年７月25・26日に開催されました「アーツ・アンド・クラフツ・セツルメント国際会議2003」所長講演要旨と、11月８日に行われました公開シンポジウムの報告を掲載いたします。また、客員研究員の広場では、吹抜悠子先生が研究会の報告とご自分の研究紹介をして下さいました。ご覧下さい。

関東学院大学における セツルメント運動の歴史と展望

――Service Learning の視点から――

所長　森島　牧人

第３回
アーツ・アンド・クラフツ・セツルメント国際会議横浜・大阪2003「近代日本の芸術と社会」
講演日時：2003年７月25日（金）午後４時－５時
場　　所：関東学院大学金沢八景キャンパス、フォーサイト21 10階大会議室

今回私どものこの関東学院大学において、2003年度「アーツ＆クラフツ運動とセツルメント運動」国際シンポジウムを開催することが出来ましたことを、大変うれしく思っております。と申しますのも、この国際シンポジウム開催は、関東学院大学が後援し、「人間環境研究所」と私が所長を務めます「キリスト教と文化研究所」とが共催する初めての企画だからであり、またそのテーマはわたしたちの関東学院に深く関係するものだからです。今回わたしは表記の題目で発表の機会をいただいたのですが、紙面の関係でその詳細をここに記すことは出来ません。そのことはまた別の方法でしたいと考えております。そこで今回はその発表の趣旨についてのみ、若干報告をさせていただきます。

さて、関東学院がかって、昭和の初め頃（1931年４月25日）、横浜にセツルメントを開いたことは、「関東学院百年史」にも載っていますので多くの方がご存知のことと思います。わたしは、これこそ関東学院らしさであり、関東学院の歴史において、その神学教育史と共に決して忘れ

てはならないものであると思っています。この「神学教育」と「セツルメント」こそは、横浜バプテスト神学校を創設し、”He lived to serve”とその墓石に刻まれたＲ.ベネット先生と、学院のモットー「人になれ　奉仕せよ」を残された坂田祐先生、この両先生の教育における精神を具現化したものにほかならないからです。関東学院らしさのルーツ、関東学院教育の原点であると思うからです。しかし、まことに残念なことに関東学院は、それら両者をその歩みの中で切捨て、放棄してきました。

いま、関東学院のセツルメント運動に思いをはせるとき、それは単なる幻ではなく、明確な教育理念に基づいた関東学院教育の「実験教室」であったと思います。それは、ただ単に社会福祉に関する高邁な理念を教わる場であっただけでなく、また、ただ単に弱者への同情心を学んだのでもなく、ただ単に慈善・愛憐に尽くすことを学んだのでもなく、まさに共に生きる、その空間の只中で、それぞれが一個の人間として共に学びあい共に成長しあう場、その意味での関東学院教育の現場であり、建学の精神の実験室であったのであります。

さて今回このテーマの下に私が発表に立った意図は、私がこのセツルメントに関する専門家、もしくは関東学院のセツルメントを長年研究しているからでもありません。今日、私は関東学院大学の宗教主事（チャプレン）としてここに立っております。つまり、本学における宗教教育活動の責任を担うものとして、このテーマに関し発題するつもりであります。言葉を変えて申すならば、あの関東学院セツルメントは、関東学院史における「異なるもの」理解への神学的・実践的試みへのプロローグであったと考えるからであります。と申しますのも、学院のアイデンティティ、学院の個性の構築が叫ばれる昨今、この国際シンポジウムがそのテーマとするセツルメント運動を私どもが共に考えるということは、“Service Learning”という、わたしたち関東学院にとっては古くて新しいこの観点から、再度学院教育の理念とその実践プログラムに関し、私たち自身が考え、また具体的にそれを構築する第一歩になると確信するからです。

ゲーガン館長と森島所長

横浜「セツルメント・デー」国際会議参加者　チャペル前にて

公開シンポジウム
「坂田祐と関東学院」の報告

帆苅　猛

今年度のキリスト教と文化研究所の公開シンポジウム「坂田祐と関東学院」が、11月8日（土）、午後1時より、フォーサイト21－601教室を会場に40名あまりの参加で開催された。

はじめに、森島所長が研究所を代表して挨拶し、引き続いて、今年度のシンポジウムの担当をした「キリスト教と日本の精神風土」研究グループ代表の椿木先生が、シンポジウムの趣旨を説明した。この後早速、三人の講師陣による発題に移った。

まず最初は、小川先生の「坂田祐の東大卒業論文『預言者耶利米亜』について」であった。これは、小川先生が関東学院に学院長として赴任されて、坂田記念館で坂田先生の東大の卒業論文を目にされてから研究を進めてこられたものであった。今回は、坂田先生が論文作成のために使用された参考図書も紹介しながら、論文の概要を紹介してくださった。小川先生のお考えによると、坂田先生のエレミヤについての論文は、内村鑑三の『興国史断』の影響を受けているのではないか、ということであった。さらに小川先生は、坂田先生の日記の中から、坂田先生が論文を完成したときの「感想」ならびに、論文の指導・評価にあたった石橋智信先生の独文による評価（下書きのもの）をも紹介してくださった。坂田先生の卒業論文はいままでほとんど紹介されてこなかったので、貴重な学びであった。

次に、大島良雄先生が「坂田祐と関東学院の教育」と題して、坂田先生の生涯をたどりながら、その教育との関わり、とくに、関東学院における教育を話してくださった。まず、準備のときとして、木村清松牧師やタッピング、内村鑑三との出会いから東京大学を卒業して、東京学院の教師となるまでを紹介してくださった。そのなかで、東京大学の卒業諮問で「非戦論」を主張したこと、そしてこれは内村からの受け売りではなくて、坂田先生がご自分で日露戦争に参戦した経験から導き出されたのであり、この非戦主義は終生変わらなかったことを紹介してくださった。次いで、1919年に中学関東学院を設立し、その院長に就任してからの活躍について話してくださった。中学関東学院の責任者になったとき、坂田先生は内村鑑三に報告し、その指導を仰いだ。内村は、おおいにやれ、ただ、武士道の土台の上に学校を立てることと、一日も早く経済上の独立を達成するように、と助言したということであった。

最後に、ご子息の坂田創先生が、「家庭における坂田祐」というテーマで、坂田先生のプライベートな様子を話してくださった。ご家庭でもよく聖書を読み、祈っていたこと、動物、とくに馬が大好きだったこと、コーヒーと蒲焼きが大好きだったことなど、公にはあまり知られていないところをご紹介してくださった。

このあと、一時間あまり、質疑応答が活発になされた。さらに、5時過ぎより、会場を教職員ホールに移して懇親会が催された。ここでも親しい交わりがもたれて有意義なときであった。

客員研究員の広場

「いのち」を考える研究プロジェクトに参加して

吹抜　悠子

「キリスト教と文化研究所」が発足し、客員研究員の資格で参加させていただく幸いに恵まれました。研究会に出席するのは私にとって、他の何ものにも換え難い深い喜びになっています。

今年度に入り、５月６日第１回「2003年度いのちを考えるプロジェクトの活動方針、活動計画について」（司会：松田和憲先生）の会合が開かれ、“「いのち」のリアリティーを子供が育つ場から考える”を通年のテーマとして、５回にわたり研究会が開催されました。５月28日に第２回“「いのち」を考える教材と教育実践”（安達　昇先生）７月23日に第３回“保育の場から「いのち」を考える”（大豆生田啓友先生）、10月22日に第４回“母から娘へ―「いのち」について実例を語る―”（リサ・ゲイル・ボンド先生）、11月26日に第５回“いのちに関する法のあり方”（三浦一郎先生）と、進められました。

小学校教育、幼児教育・保育、養親としての子育てまで含め、それぞれの方の日常の経験に立脚した貴重な研究発表が積み重ねられてきました。インターネットを通じて研究所を知り客員研究員となられた先生もおられ、大学内の研究所でありながら、職場・家庭や地域での役割も多様なメンバーが顔を揃えていることで、プロジェクトが活気づいているように思われます。新鮮な問題提起を含むプレゼンテーションを受けて活発な議論をし、時には閉会後も時間を超えて３～４名が話題に没頭し続けたりします。

ところで、私自身の研究分野は、人間科学、中でも「死生学」に属するのですが、死生学そのものが学際的な分野でもあります。そこでは、1990年代中ごろ世界保健機構（WHO）の健康の定義の改正案の中で論じられた、「健康とは、完全な肉体的・精神的・スピリチュアル及び社会的福祉の動的状態であり、単に疾病または病弱の存在しないことではない。」の文言に端的に表現されている人間理解、すなわち「人間には肉体的・精神的・社会的・スピリチュアな諸側面がある」とする全人的（ホーリスティック）な捉え方が一般化しています。最近顕著に見られる傾向は、人間の“スピリチュアリティー（spirituality）（霊性）”の概念が採り上げられていることです。私自身もこのことに着目し、現在担っている相談員としての働きにおいて、スピリチュアル・ケアまで深度をもちたいと心がけています。ある時、同じプロジェクトの先生方と今日の世相を語り合って、「今、特に若い人たちが苦しんでいる」という感想に共感しました。今、人の魂のもっとも深いところからの飢え渇きの叫びが、此処彼処から聞こえているのではないかと、実感しています。

プロジェクトに参加することは、私にとって現実を新たな眼で観て自らの課題を吟味できる良い機会となっています。「いのち」を考える諸問題を全人的な把握による人間理解の枠組みから咀嚼していき、もう一度自ら洞察を深め、今後の研究を進めてゆきたいと、切に願っております。